

# 紀 要

## 第 11 号

### 目 次

序

- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (瀬 口 眞 司)  
—地域の検討1. 湖東北部地域—
- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (小 島 孝 修)  
—地域の検討2. 湖東南部地域—
- 櫛の造形 —縄文時代の竖櫛—…………… (中 川 正 人)
- 滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描…………… (田井中 洋 介)
- 今津妙見山古墳にみる古墳の築造と葬送手順の一例…………… (横 田 洋 三)
- 古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域…………… (細 川 修 平)
- 長浜市石田町所在の石棺について…………… (北 原 治)
- 観音寺山南麓における横穴式石室墳の一例…………… (辻川哲朗・山中 繁)  
—蒲生郡安土町石寺所在谷川筋古墳群の調査—
- 蒲生郡の渡来氏族とその文化…………… (大 橋 信 彌)
- 草津市笠山古窯出土遺物の紹介 (続) …………… (畑 中 英 二)  
—窯詰めの方法の復元について—
- 森瓦窯再考 —「田原道をめぐる二つの地域」補遺—…………… (重 岡 卓)
- 近江式装飾文よりみた小形板碑の年代…………… (兼 康 保 明)

1 9 9 8 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 蒲生郡の渡来氏族とその文化

大橋 信彌

はじめに

近江国蒲生郡は、天智8年(669)白村江の敗戦後亡命した百済の貴族鬼室集斯・余自信らの一行700余人が安置されたことでも著名であるが、それより以前すでに多様な渡来文化が華麗に花開いていたことは、案外知られていない。小論ではかかる蒲生郡の渡来文化の様相を、郡内において有力であった渡来氏族、安吉勝氏や大友日佐氏の動向と関連させて検討することにした。

## 1 蒲生郡の渡来氏族

蒲生郡の古代を考えるうえで、大きな位置を占めるのは、渡来氏族の活躍とその文化である。第1図

にみえる渡来氏族は、御船氏、民忌寸氏、調忌寸氏、民使氏、大友日佐氏、大友氏、錦日佐氏、明波漢人氏、安吉勝氏、秦氏などで、かなりの数に達する。ちなみに現在知られる蒲生郡の古代人名の約20%強を占めており、比較的史料の多い佐々貴山君氏を除けば、30%を越える存在なのである。このことだけでも古代の蒲生郡における渡来氏族の大きな役割が推測されよう。蒲生郡に多くの渡来氏族が分布することについては、この地域で最有力の古代豪族佐々貴山君氏が、大和政権の対外交渉と深い<sup>(1)</sup>かかわりをもっていたことも無視し得ないが、郡の中で大きい面積をしめる蒲生野の開発という問題も注意する必要がある<sup>(2)</sup>であろう。

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
鬼室集斯	余自信	秦刀目完	安吉勝乙浄刀自	安吉勝沢雄	安吉勝真道	安吉浄成	阿口勝足石	明波漢人志己夫	桑原大□	桑原史人勝	錦日佐名吉	大友兼平	大友行商	大友馬飼	大伴日佐広国	大友日佐千嶋	調忌寸三田□	民忌寸□	民使弓□	御船氏	人名	
天智八年是歳	大同二年七月二十一日	天智八年是歳	昌泰二年十月二十三日	同 右	承和七年九月二十日	天平勝宝六年八月	同 右	大宝元年(靈龜元年)	和銅四年(靈龜二年)	天平宝字二年六月二十五日	延暦六年七月十七日	天曆十年六月十三日	養老(神龜)	承平二年正月二十一日	同 右	天平二十年四月二十五日	同 右	同 右	和銅四年(靈龜二年)	年紀年代		
蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	同 右	蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	神崎郡	蒲生郡	蒲生郡	甘作郡	蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	蒲生郡	郡名	
			安吉郷				阿伎里	西里	佐々支部				雄諸郷	安吉郷	桐原郷	桐原郷	西里	西里	薩郷	郷(里)名		
学職頭					美濃国大掾	未選舎人									擬大領	千嶋戸口	戸主			第六代天台座主	官職ほか	
	下	佐平、大錦			正六位上			大初位上			正八位下	従八位上									位(↓は昇叙階)	
「遷居近江国蒲生郡」	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「類聚国史」第五十四	「源昇家領近江国土田莊田注文」(平安遺文)二三九頁	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	「日本書紀」同日条	出典史料名/備考

第1図 蒲生郡の渡来人名一覽

そこで蒲生郡における渡来氏族をみると、そこに大きく二つのグループのあることが注目される。わが国の古代の人口に占める渡来人の割合は明らかでないが、弘仁6年(875)に編纂された『新撰姓氏録』には、当時の京と山城・大和・摂津・河内・和泉の5ヶ国に居住し、中央政府の要職を占めていた1,059氏の家柄・出自リストが書かれており、そのうち324氏(約30%)が自ら渡来氏族であることを主張している。この324氏の中でとくに有力な氏族が、応神天皇の時にその祖阿知使主らが「党類十七県」を率いて来日したとする倭漢直氏と、同じく応神朝にその祖弓月君が「人夫百二十県」を率いて百済から来日したとする秦造氏で、大和政権の中枢に登用され、大きな勢力を築いていた。倭漢氏と秦氏は、中央はもとより、各地の大小の渡来人をも配下に組織しており、蒲生郡の渡来氏族の場合も、欽明朝ごろに来日した王辰爾の子孫である船史氏の一族とみられる御船氏を除けば、民忌寸・調忌寸・民使・大友日佐・錦日佐・明波漢人らの諸氏が倭漢氏系のグループに、安吉勝氏・秦氏らが秦氏系のグループにはいるようである。そこで次にこれら蒲生郡に居住する渡来氏族が、いつごろ、またどのような事情で蒲生郡に移住し、どのような役割を果たしたかについて考えてみたいが、それを示す文献は皆無であって手がかりはほとんどない。そこで、少し視野を広げて近江の全域に分布する、これら渡来氏族の一族や同族のあり方も参考にして、課題に迫ることにしたい。

## 2 志賀漢人の進出

さきに倭漢氏系の渡来氏族とした民忌寸・調忌寸・民使などの諸氏は、倭漢氏を構成する坂上直・文直・大蔵直の諸氏の同族であるが、大友日佐・錦日佐・明波漢人などの諸氏は、5世紀末以降に新しく渡来して、倭漢氏の配下となった漢人村主と呼ばれる一団で、後漢孝献帝を共通の始祖としていただく、後の近江国滋賀郡南部、現在の天津北郊に定着した渡来氏族である。これらのうち、その居住地の判明するのは、篠筈郷の民使、西生郷の民忌寸・調忌寸・明波漢人、桐原郷・安吉郷の大友日佐などの諸氏で、特に明確な傾向は認められないが、志賀漢人

の大友日佐氏が郡の西部で有力であったことは注目される。

『坂上系図』に引用される『新撰姓氏録』の逸文には、仁徳天皇のころ応神朝に来日していた倭漢氏の始祖阿智王が、朝鮮三国に離散していた同郷の漢人を来日させることを提言し、その大半が後の大和国高市郡に定着したこと、やがて高市郡が手狭になったので近江・摂津などの諸国に分置したとあり、それが各地の漢人村主のおこりであるとみえる。そして実際各種の古代の文献によって、近江国滋賀郡を本拠とする漢人村主の存在が確認される。その主要のものをあげると、大友村主・大友日佐・大友漢人・穴太村主・穴太史・穴太野中史、錦部村主・錦部日佐、大友丹波史・大友桑原史、志賀史・登美史・槻本村主・三津首・上村主の諸氏で、後の滋賀郡大友郷を本拠とする大友村主氏一族、大友郷南部の穴太を本拠とする穴太村主氏一族、錦部郷を本拠とする錦部村主氏一族、古市郷を本拠とする大友丹波史氏一族がなかでも有力であった。

これら近江の漢人村主は近江へ移住した当初は、このような多くの一族に分かれていたのではなく、志賀に居住する漢人として、志賀漢人と呼ばれたらしい。『日本書紀』推古16年(608)9月11日条には、唐の使者裴世清が帰国する際、小野臣妹子を大使とする遣唐使が派遣されたことがみえる。その時8人の学問僧が同行しているが、その中には、「大化改新」で活躍する高向漢人玄理や南淵漢人請安らもいたが、近江出身とみられる志賀漢人慧(恵)隱の名もみえる。このことから、推古朝ごろには、志賀漢人が近江に居住し、その中から早くも遣唐学問僧を出す状況が生れていたことが判明する。

天津北郊における渡来氏族の実在を示すものとしては、他地域に類例がなく、ミニチュア炊飯具や銀ないし銅製の釵子を副葬し、方形プランのドーム形の横穴式石室を主体とする群集墳の盛行であり、その時期は5世紀末から7世紀中葉である。また志賀漢人一族の氏寺とみられる、穴太廃寺、坂本八条廃寺、南滋賀廃寺、園城寺跡などが造営されるのは、7世紀中葉から後半であり、ほぼ文献からみた志賀漢人の形成を裏づける。<sup>(5)</sup>

それでは志賀漢人は、どのような事情で、天津北

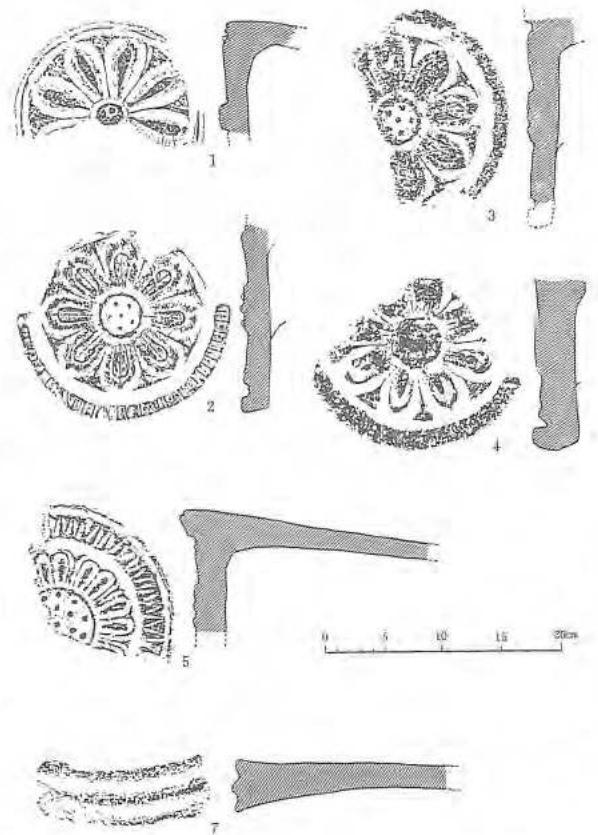
郊に居住するようになったのであろうか、実はこの点についても、それを解明する手がかりは全くないのであるが、大津北郊には、琵琶湖の水運のカナメである「志賀津」と呼ばれる港湾施設があり（後の大津）、後にその地に近江大津宮が造営されるように、大和政権の経済的・軍事的な基盤であった東国・北国への交通の起点であり、しかも6世紀以降、活発化した越前を拠点とする高句麗との対外交渉においても、大津北部を含む近江西部が重要な役割を果たしたとみられる<sup>(6)</sup>。

周知のように6世紀以降の大和政権の内政・外交を領導したのは名実ともに蘇我大臣家であり、それを実質的にささえたのが、倭漢氏であった。したがって、おそらく6世紀以降、新しい東国政策や日本海ルートの大外交渉を推進しようとする蘇我氏の指示により、倭漢氏がその配下の漢人を大津北郊に配置し、その政策を押し進めようとしたと考える。したがって蒲生郡に居住する倭漢氏の一族、民忌寸・調忌寸・民使の諸氏の存在は、あるいは志賀漢人を統括するため、蘇我氏により派遣されたことを示しているのかもしれない。

その点で注目されるのは、近江の各地に居住する志賀漢人の分布の特徴である。志賀漢人の分布の中心は、あくまでその本拠である滋賀郡南部であるが、浅井郡・坂田郡・犬上郡・愛知郡・神崎郡・野洲郡・栗太郡そして蒲生郡などに濃密な分布が知られるのである。またその居住地をみると、浅井郡では川道里(郷)に大友史氏、益田郷に錦部日佐氏、坂田郡では朝妻郷に穴太村主氏、犬上郡では竇田郷に穴太村主・錦村主・穴太日佐の諸氏が、愛知郡では平流五十戸(里)に丹波博士(史)氏、神崎郡には雄諸郷大津里に大友氏、野洲郡では馬道郷に大友・登美史・石木主寸・郡主寸の諸氏が、栗太郡でも木川郷に大友日佐氏・志賀史氏らが居住しており、いづれも郡内で琵琶湖に隣接した地域に拠点をもっている。そして、その居住地には坂田郡の朝妻湊のように港湾施設をともなっている場合も少なくないと考えられる。これらの点から琵琶湖の水運のカナメである滋賀郡の志賀津に本拠をおく志賀漢人が、近江各地の主要な港湾施設のある地に進出し、その周辺に拠点を拡大していった様相が推測されてくる<sup>(7)</sup>。蒲生郡

の場合、西生郷に明波漢人氏の居住が知られるが、同氏の本拠は犬上郡の沼波郷とみられ、蒲生郡に進出してきたとみられる。この点についてはやはり桐原郷と安吉郷に居住する大友日佐氏が注目される。安吉郷は秦氏系の安吉勝氏の本拠地としてよく知られている<sup>(8)</sup>。桐原郷は近江八幡市西南部の安養寺・森尻・池田・古川などの諸村を故地とすることで諸説一致しており<sup>(9)</sup>、西に隣接する船木郷はその郷名どおり、琵琶湖に面しており、琵琶湖の水運とのかかわりも、一応推測させる。また同じ大友村主氏の一族とみられる大友氏が、隣の神崎郡にも分布し、雄諸郷大津里に拠点をもっていることは、このような想定を支持すると考える。

なお後述するように、大友日佐氏の本貫地である桐原郷に含まれる近江八幡市安養寺町に安養寺廃寺が所在し、その主体をなす軒丸瓦には、周縁に輻線文を施すものがみられる。輻線文をもつ軒丸瓦は、近江においては、大津北郊の志賀漢人の氏寺とみられる諸寺院、南滋賀廃寺・穴太廃寺・崇福寺跡などで出土している<sup>(10)</sup>。これらのデータは安養寺廃寺が桐



第2図 安養寺廃寺の軒丸瓦・軒平瓦 (注14文献より)

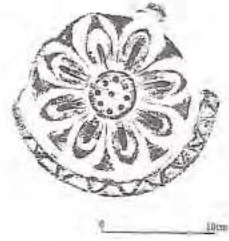
原郷に本拠をおく大友日佐氏の氏寺である可能性を示唆するものであろう。以上の点から大友日佐氏を中心とする蒲生郡に進出した志賀漢人一族は、7世紀後半代には、郡内においてかなりの勢力を築いていたことが推測される。そして承平2年(932)1月21日付の「源昇家領近江国土田荘田地注文」には、大友日佐氏の一族とみられる、大友馬飼という人が、蒲生郡擬大領として

見え、平安時代の前半には、それまで蒲生郡の郡領氏族をほぼ独占してきた佐々貴山君氏に並ぶ地位にまで勢力を伸長させていることが確認される。これらの点から坂田郡の穴太村主氏、浅井郡の錦部村主氏などと並んで、蒲生郡に進出した大友日佐氏が、土着化し郡内においても大きな成功をおさめたことが判明する。

また、近年発見された平城京「長屋王家木簡」に「蒲生郡佐々支部桑原 大口依」とあり、これにみえる「佐々支部」が「佐々支郷」の誤りとするなら、「桑原」はウジ名である可能性が高く、神崎郡で大きな勢力をもっていた志賀漢人の一族桑原史氏が、蒲生郡にも居住していたことが明らかになるし、それと同時に篠筈郷が内湖に面した湖辺に存在すること、しかも郷内に倭漢氏の一族民使氏の居住が確認されており、先にみた志賀漢人の蒲生郡への進出状況を示すものとして注目される。

### 3 安吉勝氏の動向

安吉勝氏については、大宝元年(701)から靈龜元年(715)ころとされる平城京左京二条二坊十一・十四坪出土の「過所木簡」に、「蒲生郡阿伎里人阿<sup>[佐カ]</sup>勝足石」がみえ、さきの「土田荘田地注文」にも、安吉郷の住人として、安吉勝乙浄刀自以下、多数の安吉姓の人名がみえており、蒲生郡安吉郷に本貫のある豪族で、その地名をウジの名としていることが判明する。このため、その出自などについても、確認できる手がかりはないが、勝(スグリ)というカバネ



第3図 倉橋部町周辺地形図・倉橋部廃寺の軒丸瓦(注(8)・(14)文献より)

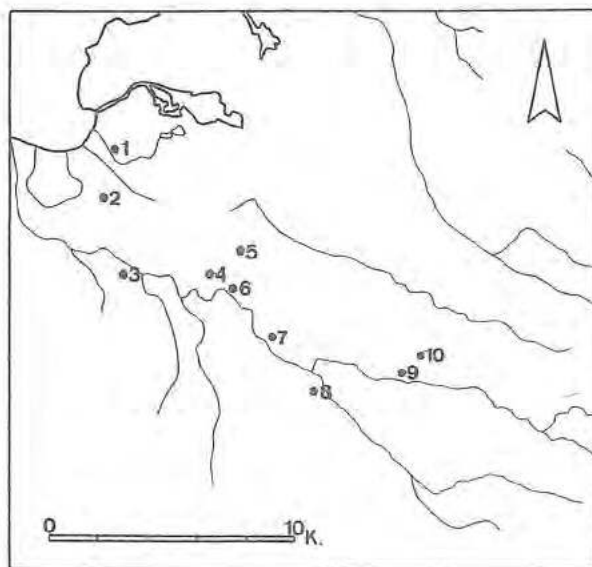
を負っている点は注目される。

勝は志賀漢人の一族が負う村主・日佐などと同じく、朝鮮の小村落首長の尊称で、スグリと訓まれているが、その表記を勝としている点は、秦氏の一族に比較的多いことから秦氏とのつながりが想定される。事実『日本書紀』雄略15年条には、秦酒公に秦民を集めて管理させたことがみえ、酒公は「百八十種勝」を率いて、各種の高級な織物を朝廷に貢納、うず高く積み上げたので、「禹豆麻佐」の姓を賜わったことがみえる。おそらく倭漢氏系の漢人村主と同じように5世紀末以降新しく渡来し、各地に定着した人々の中で、勝のカバネを得て秦氏の配下に組み込まれることがあり、安吉勝氏もそのひとつであったと考えられる。

近江における秦氏の分布は、ほぼその全域にみとめられるが、その特に顕著な地域は、依知秦公氏が郡の大領・少領を独占していた愛知郡、坂田郡の息長丹生真人氏とともに、中務省の画工司の画師として活躍した管秦画師氏を出した犬上郡、郡の東部の大原郷・長岡郷などに秦姓のものが多く坂田郡など、湖東北部から湖北に集中している。そしてその居住地域をみると、いずれも比較的水利環境の悪い場所であり、山城国に本拠を置く秦造氏が桂川に「山背大堰」を築き、山城盆地を開発したように、未墾地の開拓や、養蚕など新しい技術による殖産に力量を発揮したことが推測される<sup>(13)</sup>。

以上のように考えられるなら蒲生郡の安吉勝氏も、日野川流域の安吉郷を本拠としつつも、蒲生野の開

発にかかわった可能性がかなり高くなってくる。安吉郷の故地とみられる現在の近江八幡市倉橋部町には、その北方、山麓に安吉神社・安吉山愛楽寺が所在し、『今昔物語』にもみえる「安義橋」の名は、日野川にかかる現橋にうけつがれている。また集落南側の田畑からは、単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする白鳳時代の瓦が出土し、倉橋部廃寺の存在が推定されている。いっぽう竜王町山面に所在する三ツ山古墳群は、横口式石室をもつことで著名であるが、このほか雪野山・鏡山にも後期の古墳群があり、安吉勝氏にかかわる可能性が高い。これらの点から安吉勝



1. 船木廃寺
2. 加茂廃寺
3. 安養寺廃寺
4. 千僧供廃寺
5. 牟佐寺跡
6. 倉橋部廃寺
7. 雪野寺跡
8. 宮井廃寺
9. 綺田廃寺
10. 石塔寺

第4図 日野川流域の古代寺院跡（注⑧文献より）

氏は、7世紀後半ごろには、蒲生郡内で、一定の勢力を築いていたことが憶測される。その点で注目されるのが、さきにふれた「過所木簡」の内容である。

この木簡は平城京朱雀門の内側のバラス敷道路西側溝から出土したもので、次のようなものである。

・関、司前解近江国蒲生郡阿伎里人大初上阿<sup>(後カ)</sup>勝足石許田作人

・同伊刀古麻呂 大宅女右二人左京小治町大初上送行乎我都 鹿毛牡馬歳七

笠阿曾弥安戸人右二  
里長尾治都留伎

内容は少し難解であるが、当時宮都のあった藤原京の左京小治町の住人大初位上笠阿曾弥安の戸人である、阿伎勝伊刀古麻呂と阿伎勝大宅女の二人が、蒲生郡阿伎里の人で大初位上の阿伎勝足石のもとに「田作人」としてやってきて、仕事を終えて帰る際、各関所を通過する時の証明として、阿伎里の里長である尾治都留伎に作成してもらった文書木簡とみられている。おそらく藤原京にもどった伊刀古麻呂と大宅女の2人が、不用になったこの木簡を溝に投棄したのであろう。

この木簡により、蒲生郡の阿伎里に本拠をおいて

いた安吉勝氏の一族が、藤原京に進出し、農繁期には一時帰郷していたことが確認されるわけで、足石が大初位上という位階をもつように、中央の下級官人に登用されるものもあったのであろう。天平勝宝6年(754)の文書に東大寺写経所の写経生としてみえる未選舎人の安吉浄成もその一族であった可能性がある。そしてこのことは、安吉勝氏の在地における勢力の伸長を推測させるのである。

#### 4 蒲生郡の古代寺院とその性格

以上、蒲生郡において活躍した渡来氏族の二大勢力の動向を追跡してきた。これによって、蒲生郡に渡来氏族が定着したのは、5世紀末から6世紀後半であり、新しい技術や能力をもって渡来した人々で、それぞれ倭漢氏・秦氏という有力氏族の傘下につらなっていたことが明らかになった。そして志賀漢人の一族である大友日佐・錦日佐氏らは、琵琶湖水運のネットワークの一環として、蒲生郡に進出し、日野川流域の村々や蒲生郡などで得られた物資を集積・交易し、志賀津に運出していたとみられるが、7世紀後半には桐原郷に安養寺廃寺を造営するまでに勢力を伸し、さらに平安時代には郡大領を出すに到っているのである。

一方、秦氏の配下につらなった安吉勝氏も、7世紀後半ごろには安吉郷内に、倉橋部廃寺を造営する

とともに、その一族が中央の下級官人に登用され、平安時代にはいると『続日本後紀』承和7年(840)9月20日条にみえる正六位上美濃国大掾安吉勝真道のように、国司として活躍するものも現われており、着々と勢力を拡大していることが確認される。

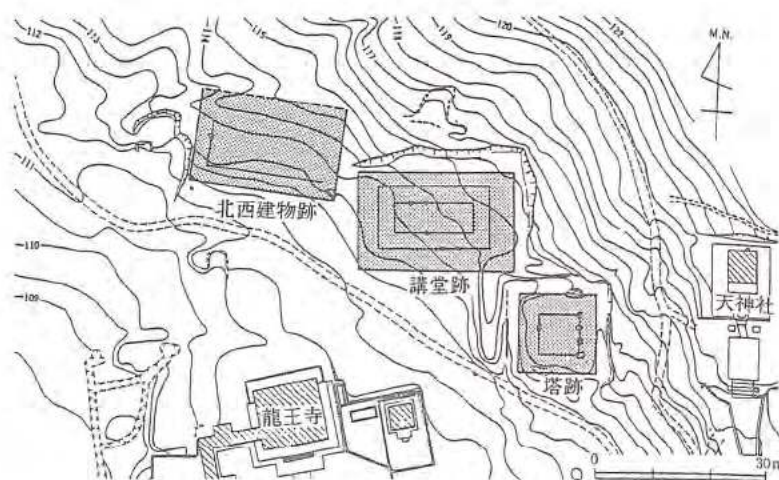
このような郡内における渡来氏族の動向を確認できるなら、文献資料こそ残されていないが、蒲生町内に所在する古代寺院のあり方からこの地域の渡来氏族の役割についても、若干の示唆<sup>(14)</sup>が得られる。

蒲生郡の古代寺院については、実態の明らかなものは多くないが、日野川流域を中心に10箇所を数える。これらの古代寺院は、ほぼ各郷に1~2寺みられ、篠田郷の千僧供廃寺、船木郷の船木廃寺、桐原郷の安養寺廃寺、安吉郷の倉橋部廃寺と雪野寺跡、篠筈郷の武佐寺跡と下豊浦廃寺、そして東生郷の綺田廃寺と石塔寺、西生郷の宮井廃寺という配置が推定される。

このうち千僧供廃寺は近江八幡市千僧供町の白鳥川左岸に所在し、遺構は明確でないが、古瓦の出土から寺院跡と推定されている。江戸時代に出土したとされる瓦は、単弁九ないし十葉の軒丸瓦で、八日市市瓦屋寺所蔵のものと類似することが指摘されている。昭和57年度のは場整備事業では、雷文縁と独特の八葉という二種の軒丸瓦が出土しており、雷文縁のものは、蒲生町の宮井廃寺で大量に出土しており、関連が注目される。

船木廃寺は近江八幡市船木町の八幡山の南西麓に所在し、遺構そのものの発見はないが、付近より古瓦の出土が報告されている。近江八幡市立郷土資料館所蔵のものは、単弁八葉軒丸瓦で、『滋賀県史跡名勝天然記念物概要』に1点、『近江蒲生郡誌』に2点の複弁八葉蓮華文軒丸瓦の拓本が掲載されている。

安養寺廃寺は近江八幡市安養寺町に所在し、伽藍配置などは明確でないが、その主体をなす軒丸瓦には、周縁に輻線文を施すものがみられる。輻線文を



第5図 雪野寺跡の伽藍配置（『蒲生町史』第1巻より）

もつ軒丸瓦は倭漢氏の氏寺である大和の檜隈寺跡で主要なものであり、近江においては、大津北郊の志賀漢人の氏寺とみられる諸寺院、南滋賀廃寺・穴太廃寺・崇福寺跡などで出土している。

倉橋部廃寺は、近江八幡市倉橋部町に所在し、寺院に関する明確な遺構の発見はないが、その集落南側の田畑からは、単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする白鳳時代の瓦が出土し、寺域を限ると考えられる水路が発見されており、方1.5町の寺域が推定されている。

竜王町雪野寺跡は竜王町川守の竜王山の山麓に所在し、古来古瓦の散布が知られていたが、昭和9~10年に調査がなされ、塔跡1基を確認、大量の瓦や塑像、風鐸6個などが出土した。また昭和61年からの調査では、講堂跡と北西建物跡が確認されているが、伽藍配置については、明確になっていない。出土瓦より創建年代は、7世紀後半代とみられるが、奈良時代の終わりには、瓦葺建物は廃絶したらしい。雪野寺跡の瓦は、いわゆる「湖東式」の軒丸瓦と指頭圧痕文をもつ軒平瓦のほか、いわゆる「川原寺式」の軒丸瓦も出土しており、その性格が注目される。

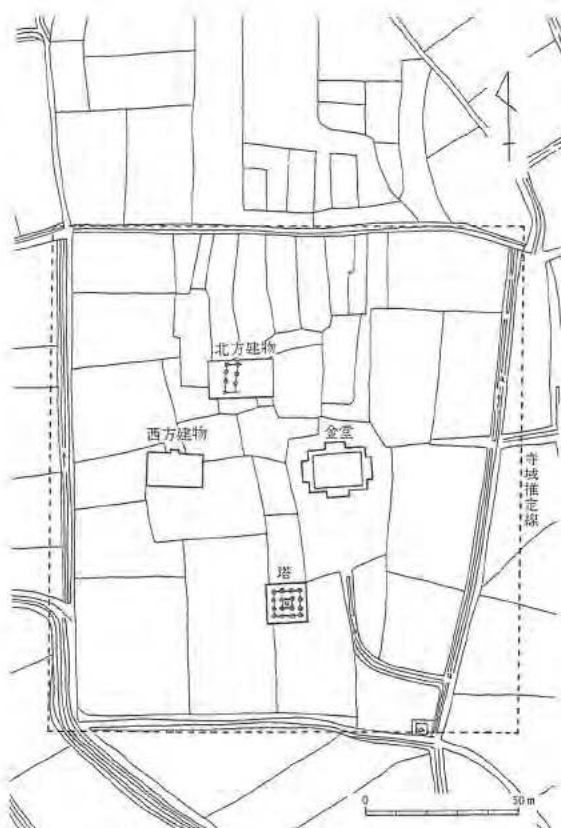
武佐寺跡は近江八幡市長光寺町の瓶割山の山麓、現在の長光寺と重複して所在するとみられている。寺伝に一名武佐寺とあり、聖徳太子の開基を伝えているほか、その裏山より四重弧文軒平瓦の出土が知られ、白鳳時代の寺院跡が推定されている。

下豊浦廃寺は、安土町下豊浦の安土山南麓に所在し、単弁八葉蓮華文と素弁八葉蓮華文の鬼板が各1点出土したほか、単弁八葉蓮華文軒平瓦が1点出土している。このほか安土山北東山麓から、複弁八葉蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦が発見されているが、遺構の手掛かりはない。

綺田廃寺は石塔寺の南1.5kmの綺田集落の中にあり、石塔寺の前身ともいわれているが、佐久良川の北にほぼ方2町の寺域が推定されている。正式な発掘調査は一部寺域の西端でなされただけで、伽藍配置等は明らかでないが、土壇状の高まりが2個所で認められている。また出土瓦は白鳳時代から平安時代前期のものまで含むが、白鳳期のものは愛知郡の諸寺院で多くみられる「湖東式軒丸瓦」であり、この寺院の造営者と、愛知郡の有力豪族依知秦公氏とのつながりを示唆している。

石塔寺跡については、著名な三重石塔が白鳳時代のものとされるほか、遺構・遺物の発見はなく、その実体は明らかでないが、三重石塔が百濟様式とされているところから、渡来氏族やその文化とかわりの深いことが推測されるだけである。

次に宮井廃寺は、日野川左岸の蒲生町宮井に所在し、古くから瓦の出土や礎石・塔心礎の発見により寺院の存在が推定されていたが、昭和56年から4次にわたる発掘調査がなされ、塔・金堂・北方建物・西方建物の4つの基壇と寺域を区画する溝が検出され、ほぼ全様が明らかになった。宮井廃寺から出土した軒丸瓦の主体をなすのは、外区内縁に雷文を配した「紀寺式軒丸瓦」といわれるもので、古い様式をもつところから7世紀後半代とみられている。この種の瓦は近江では、大津市崇福寺・近江八幡市千僧供廃寺でも一部使用されている。またこの軒丸瓦とセットになる軒平瓦は瓦当の下半に指頭圧痕を連続してつけた「指頭圧痕重弧文軒平瓦」と呼ばれるもので、近江では湖東町小八木廃寺や秦荘町軽野廃寺・野々目廃寺・目加田廃寺など愛知郡の諸寺院で出土するほか、竜王町雪野寺跡でみられる。したがってこの種の瓦も依知秦公氏とかわりの深いことが推測される。そして昭和62年から4次にわたって調査のなされた、宮井廃寺の瓦窯とみられる辻岡山瓦窯跡(蒲生町宮川)からは、宮井廃寺で出土した



第6図 宮井廃寺の伽藍配置(『蒲生町史』第2巻より)  
各種の瓦のほか、愛知川町畑田廃寺の軒丸瓦も出土しており、密接な交流を裏付けている。なお、宮井廃寺の金堂跡は、大津北郊の諸寺院で特徴的な瓦積基壇を採用しており、志賀漢人とのつながりも推測される。

おわりに

以上みてきたように蒲生郡域に所在する10個所の古代寺院のうち、綺田廃寺は愛知郡の諸寺院と深くかわることが明らかになり、宮井廃寺の場合は、愛知郡とのつながりも深い。一方大津北郊の諸寺院とのかかわりも無視できないことが明らかになった。後者については、同じく日野川流域の雪野寺跡でも、「湖東式軒丸瓦」・「指頭圧痕重弧文軒平瓦」とともに大津北郊の諸寺院で一般的な「川原寺式軒丸瓦」が出土しており、ほぼ同様のあり方を示している。そして安養寺廃寺では、幅線文を周縁に廻らせる軒丸瓦が主体をなしており、大津北郊の志賀漢人一族の氏寺群との同質性が確認されるのである。したがって、このような蒲生郡域の古代寺院の性格



と、さきに検討を加えた蒲生郡の渡来氏族のあり方とを関連させ考えてみるなら、おおよそ、次のような推測ができると考える。

蒲生郡は、その地理的位置から、愛知郡で大きな勢力を築いていた秦氏系の依知秦公氏とのかかわりが深く、安吉郷を中心に勢力を拡大していた安吉勝氏の存在もあって、秦氏に連なる渡来氏族が活躍していたとみられる。しかし6世紀以降、大津北郊に配置された志賀漢人の一族が、琵琶湖の水運を利用した交易ルートを近江の各地に広げ、湖辺からしだいに内陸部にも拠点を伸していったとみられ、蒲生郡においても大友日佐・錦部日佐らの諸氏が勢力を築いていったと考えられる。ただ両者は古代寺院のあり方からも推測されるように、相対立していたのではなく、相互に協力し、交流を深め勢力を伸張させていたのであろう。こうして、蒲生郡、なかでも日野川の流域では、愛知郡の秦氏系と滋賀郡の志賀漢人という、二つの系統の渡来氏族の勢力が共存する独特の渡来文化が花開いたと考えられるのである。そして、このような蒲生郡の渡来文化を背景として、天智朝の百済亡命貴族の蒲生郡配置が実現し、近江の中でも独特の古代文化を生み出すことになったのであろう。

## 注

- (1) 大橋信弥「豪族の分布」(『蒲生町史』第1巻 古代・中世 1995)
- (2) 大橋信弥「吉志舞について」(『日本古代の王権と氏族』吉川弘文館 1996)
- (3) 関見『帰化人』(至文堂 1956)
- (4) 大橋信弥「近江における渡来氏族の研究」(『青丘学術論集』第6集 1995)
- (5) 水野正好「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」(『滋賀県文化財調査報告』第4冊 1970)
- (6) 山尾幸久「近江大津宮と志賀漢人」(『東アジアの古代文化』第76号 1993)
- (7) 大橋信弥「近江における渡来氏族の研究」(『青丘学術論集』第6号 1995)
- (8) 田路正幸「『倉橋部廃寺』雑考」(『紀要』第2号 1988)
- (9) 『滋賀県の地名』(日本歴史地名大系25 平凡社 1991)
- (10) 山崎信二「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」(『文化財論叢』

1983)

- (11) 『平城宮発掘調査出土木簡概報』(二十七) (奈良国立文化財研究所 1996)
- (12) 八木充「カバネ勝とその集団」(『律令国家成立過程の研究』 塙書房 1968)
- (13) 平野邦雄「秦氏の研究」(『大化前代社会組織の研究』吉川弘文館 1969)
- (14) 小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通『近江の古代寺院』(1989)
- (15) 胡口靖夫『近江朝と渡来人』(雄山閣出版 1996)

編集後記

『紀要』第11号を発行することができました。紀要の創刊は、昭和63年3月なので本号でちょうど10年を迎えることとなります。初心を忘れることなく続けていきたいと思っております。

前号より、本文は2段組となり量的に若干の余裕ができ、本号には各時代にわたって12本の論考を掲載することができました。つきましては、多くの方々からご叱正とご指導を賜れば幸いです。 (K. O)

平成10年3月

紀要第11号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668

8923

K

滋賀県文化財  
保護協会蔵書印

440